

平成30年度第8回観察会 記録

日 時	平成 31 年 1 月 13 日 (日) ～ 1 月 18 日 (金)	
観察地	パラオ共和国 (バベルダオブ島、コロール島、マラカル島)	
講 師	與世田先生 (パラオ水産試験所)、曾根先生 (シャコガイ養殖場)	
テーマ	パラオの海に遊び、森里海を体感する	
備 考	参加者数 : 19 名 (含、田中 克先生、スタッフ 3 名)	記録 : 岩佐達、藤原雄平

1. はじめに

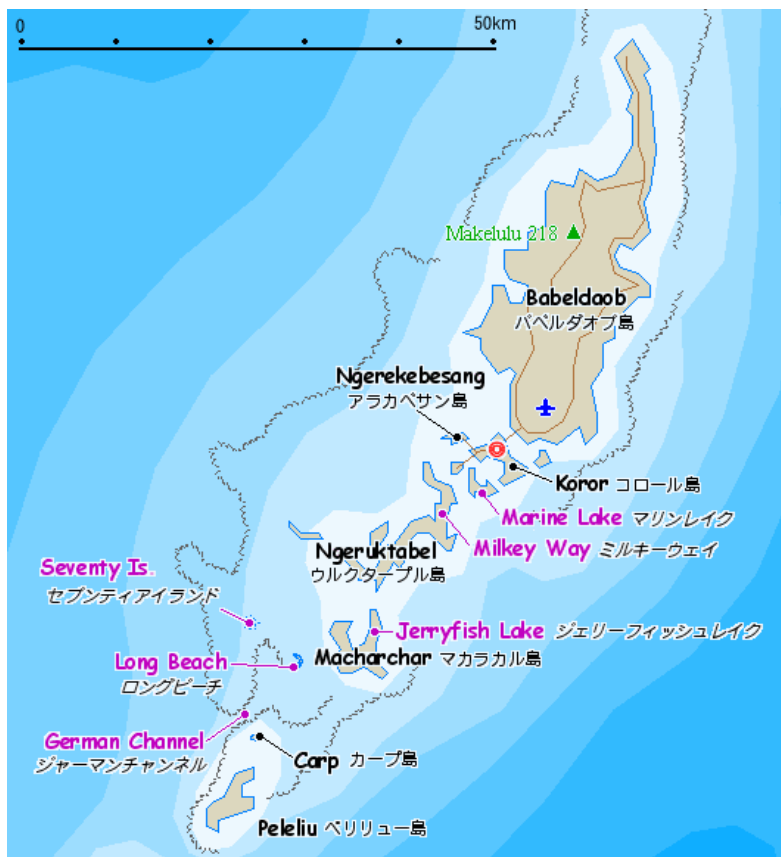
<パラオ共和国とは>

パラオ共和国は、日本の真南、フィリピンの東に位置し、大小 200 の島々から構成されている。国土の総面積は 488 ㎢で屋久島とほぼ同じ広さ。人口は約 2 万人 (内、3 分の 1 がフィリピン人中心の外国人)。1994 年にアメリカの信託統治領より独立、それ以前は約 50 年間、アメリカの統治領、それ以前約 30 年間は日本の統治領だった。1885 年以来、1994 年の独立まで外国の支配下におかれた歴史を持つ。パラオ人の 3 分の 2 は公務員、1 割程度が観光業に従事し、専業農民、専業漁民はいない。工場らしきものもない。自動車、機械・機器はじめ産業品、食肉・野菜類などの食料も輸入に頼っている。一方、国家の財政はアメリカや日本の援助金や、台湾や日本から得る漁業権収入に依存している。アメリカナイズされた生活からの反省で、パラオ文化やパラオ語

を大事にしようという機運が出ている。親日的であり、サカナ、ヤサイ、ベンジョなどそのまま通用する日本語が残っている。

<今般の観察旅行の背景>

パラオへ行く観光客はダイビングやシュノーケル、クルージングなどのマリンスポーツが中心で、コロール島以南の島々が目的地となっている。一方、国の半分近い面積を占めるコロール島北隣のバベルダオブ島は、観光開発的にはまだ後発となっている。以前からパラオと関わってこられた笹川平和財団太平洋島国事業の塩澤さんなどの発案で、バベルダオブ島でのエコツアーの開発事業が企画され、日本から鳥羽の海島遊民クラブ代表の江崎貴久さんなどが招かれて、エコツアー候補地の調査が行われた。昨年 11 月にはバベルダオブ島内 6 州の代表からなる視察団が来日し、鳥羽や西表島、熊野古道などを体験し学習した。(鳥羽を訪れた時、海島遊民クラブで、我々スタッフ 3 名と打ち合わせを実施。) いよいよ彼らが外国からのエコツアー客を迎える運びとなり、今回の我々のパラオ自然観察会がその初回の客でした。至れり尽くせりの大歓待を受けて恐縮でしたが、彼らとしては初体験のことであり、兎に角できることは全てしようという姿勢の“おもてなし”を受けました。



＜参加メンバー＞

19 名 (男性 5 名、女性 14 名)

A 班	田中 克先生	阿部 聖子	岩佐 順子	岡 里美	岡崎 道雅
	岡崎 泰代	奥野 嘉子	松本 多枝	藤原 雄平	
B 班	東脇 和子	平野 すえこ	高橋 競	間瀬 茂子	日置 宣子
	山田 一子	野崎 喜美子	西田 フミ子	藤田 益榮	岩佐 達

バベルダオブ島内を観察した 1/14～1/16 の 3 日間は、A 班、B 班の 2 グループに分かれて行動しました。各班で行程は異なるが、3 日間の中で訪問先・体験内容は原則同じになるようにしました。宿泊も A 班、B 班でグループ別の民泊（2 か所）となりましたが、夕食だけはコミュニティセンターで A 班、B 班そろって一緒に食事をし、情報交換など行いました。尚、3 回の夕食は、2 州ずつが持ち回りで担当してくれたようです。

[A 班、B 班別訪問先]

日付		A 班	B 班
1/14	AM	ガスパン州	アイライ州
	PM	ガラスマオ州	アイミリーキ州
1/15	AM	アルコロン州	ガラスマオ州
	PM	ガラルド州	ガスパン州
1/16	AM	アイライ州	アルコロン州
	PM	アイミリーキ州	ガラルド州

バベルダオブ島地図



1/15 の夕食会場のコミュニティセンター

2. 観察会記録

<第 1 日目 (1/13)>

関西空港 4F の南団体受付カウンター前に集合時間の 9 時までに 19 名全員無事に集合。ほぼ予定通り 11 時 05 分にユナイテッド航空機で関西空港発、一路乗継地のグアム空港へ。日本時間 14 時 45 分、グアム空港到着。パラオ行きのユナイテッドの出発時間まで約 4 時間もあり、自己紹介などの後は、各自グアム空港内のフードコートで夕食をとり休憩。日本時間 19



グアム空港で時間待ち



時、グアム空港出発。21 時 05 分、やっとパラオ空港に到着。阪急交通社手配のバスのバスに乗車。15 分ほどで今夜の宿泊先、パレイシアホテルパラオへ。着いて驚いたことには翌日より 3 日間お世話になるパラオの関係者が総出で待っていてくれ、それに 2 軒の民泊のオーナー、江崎さん、塩澤さん、通訳のタイ女性も加わり、ホテルのフロントは人で一杯となった。また、パラオ水産試験所の興世田さんにもお出迎

ホテルで両者顔合わせ

建ての建物はパラオ 1 の高さである。今回の観察会ではホテル泊は今晚の 1 泊のみで他は民泊する。



<第 2 日目 (1/14)>

バイキングスタイルの朝食後、A 班、B 班、2 台のマイクロバスに分乗してホテルを出発。8 時 30 分出発予定が 20 分ほど遅れての出発で早速これがパラオ時間かと思う。

(以下 3 日間の行程は A 班の行程に準拠しています。)

出発前に AB 班揃って集合写真

ガスパン州 (B 班は第 3 日目 2/15 PM)

江崎さんが通訳兼半分ガイドの役割で、ローカルな伝説や風習などの分り難い話を出来るだけ分かりやすくほぐしてくれる。数十分走った所でトイレタイム兼青空市場に寄る。バナナやマンゴの果物に野菜や、春巻のようなもの等があり、バナナを買って食べるが熟れようが遅いのか期待したほどの甘味がなかった。



石畳古道の T 字路



名前不詳



苔むした伝承の岩

舗装した車路から少し入った土道で停車。そこから続く昔から使われていた石畳の道を歩く。道のわきには熱帯性の花が目を楽しませてくれる。苔むした岩の磐余について説明を受けたが今一つ理解不足だった。この時、見つけると幸せになれるという尾羽の長い白い鳥が上空に飛来し、見た、見なかったと騒ぎになるが、実はこれはそんなに珍しい鳥ではなく、他の場所では何羽も見ることが出来た。

石畳の古道から、台湾熱帯果樹「技術団が指導する研究農園」に移動。台湾から派遣された数名の技術者が、野菜から果物まで多くの植物を栽培し、パラオに適した育成法を研究している。タロ芋はパラオの主食であるが、一口にタロ芋と言っても 20 種近い種類があるとのことで驚かされた。また一方では農園に子供たちを招き、教育にも取り組んでいるとのこと。台湾はパラオに外国公館を置く数少ない国の一つ（他は日本、アメリカ、フィリピン）であり、台湾とパラオの結びつきが深いことに気づかされた。



団長さんの講義



農園の中を見学



何種類のもタロ芋の苗

バスに乗りして次に停まった所は、大きな涼しげなかやぶきの集会所風な建物。中ではテーブルの上にたくさんの食べ物が準備されている。が、即食事とはいかず、食事の前にヤシの葉を使っのバスケット編み体験が待っていた。地元の方が模範を示してくれるのだが、みんな簡単には理解できず、風車など作っている間に、器用な何人かの人がバスケットの作成に成功した。



B 班は全員作成に成功

昼食はお弁当と事前に聞いていたので簡単なものかと思っていたら、いやいや大変な種類と量の食事が用意されていて感激でした。涼しい風が吹き抜ける小屋の中で、ゆったりと昼食をいただきました。



テーブルに並べられた昼食の品々

ガラスマオ州

(B 班は第 3 日 1/15 AM)

午後は、3 艘のモーターボートに分乗して川を下る。川の両サイドにはマングローブが生い茂り、ジャングルの中の川下りといった楽しい雰囲気。入り江から海に出てしばらく行ったところでモーター全開となり波の上を飛ぶが如くに走って、あわや転落しそうな勢いだった。またマングローブの林沿いに別の川に入ったところで上陸。石畳の道を歩いて遺跡の石のモニュメントの前で土地の人から説話を聞く。タロ芋畑を目指して、ここからしばらくトレッキング。同行の土地の人たちが歩き難い個所では手を引いてくれるなど細かな心配りに感謝。タロ芋畑では、タロ芋を掘り起こしたり、苗を植えたりと、少しだけの体験だが直にタロ芋に触れることができた。



マングローブクルーズ

そして海へ



遺跡の伝承を聞く



タロイモ畑を目指して



タロイモ畑で植えたり掘ったりの実体験

赤土のボーキサイト鉱山の跡地を見学。盛んだった頃は、山から積出港の海までベルトコンベアが走っていたらしく、その残骸が残っていた。もう 5 時を回っていたが、夕日の奇麗なところがあるから見せたいと言って車を走らす暗くなり、目的の場所（ボーキサイトの旧積出港）へ着いた時には太陽は完全に没していた。



ボーキサイト鉱山の守りに使用された機銃



ボーキサイトの旧積み出し施設

(B 班は A 班の行ったボーキサイト鉱山跡見学及びタロイモ畑での実体験はせず代わりにガラスマオの滝へのトレッキングを実施した)

B 班は第 3 日目の朝一番に深い森の奥にあるガラスマオの滝を目指してトレッキングに挑戦した。滝はかなり森を降りたところにある。観光用にかつては簡単なモノレールもあったが、今は使われておらずその残骸が残っていた。長い階段道をくだり、滑りやすい川の中を歩き、ジャングルを抜けて滝に到着、その眺めに全員が感動!! すぐに何名かが水着に着替え滝つぼに入った。ガラスマオ州事務官のマーシーさんやパスクアルさんの案内だが他に数名の現地補助スタッフが我々シニアの歩きを助けてくれた。



目指すは森の奥



長い階段を降り



川の中を歩き



ジャングルを抜けて



滝に到着、記念撮影

B 班に送れること約 1 時間、今晚の夕食場所であるアイライ州のコミュニティセンターに到着した。昼食も御馳走だったが、夕食は昼食をはるかに上回る量に質。我々が充分いただいたところからパラオの人たちが食事開始。成程彼らの分を含めての量かと納得したが、それにしてもたくさんのボリュームだった。食事中に赤禪の男の子たち数名による多分戦いの前の景気づけの踊りと思われるダンスの披露があった。あの子たちも我々の到着が遅れた時間待っていてくれたようで可哀そうなことをしてしまった。事前に聞いていたらお土産を準備したのに何も渡せるものもなく申し訳ないことをした。



少年たちの赤フンショー

食事後、A 班、B 班、それぞれの民泊所に帰宅。民泊所での第 1 夜を迎えた。(民泊所のシャワーは水しか出ないと事前に聞き、皆さんに連絡済み。ところが、B 班の民泊所ではお湯が使えたとのことで、A 班の女性から苦情がありましたが、これは、B 班の人がラッキーだったとしか言いようがありません。)



A 班とオーナーの Orrukem さん



B 班とオーナーの息子クリスさん

オーナーのオバク 酋長



<第 3 日目 (1/15) > (B 班は第 4 日目 1/16)

アルコロン州

8 時 30 分、マイクロバスに乗車し民泊所を出発。民泊所の近くにあるコンビニに立ち寄る。品数はそこそこ豊富だが、日本のコンビニを見慣れた目にはやはり少ない。今日は午前中がアルコロン州、午後ガラルド州の予定。バベルダオブ島最北のアルコロン州を目指して島中心部の自動車道を走る。行き交う車は少なく快適なドライブである。道の両サイドに海が迫る眺めの良い個所を抜けると本日最初の訪問地ストーンモノリス遺跡に到着。丘からは緑の森越しに、ライトブルーに輝く海が見下ろせる絶景の写真ポイント。丘を少し下ったところに、いくつもの巨石が半ば地面に埋まるようにして立っている。中には人の顔に見えるものもあり、イースター島のアモイ像がふと頭をよぎる。国作りにかかわる伝承が残っているようで、朝までに石の建造物を立てるといふ神との約束が守れず、途中で放棄された石材の跡と言うことだが、真実はいまだ不明のようだ。



ストーンモノリスの遺跡

バスで少し走って海辺に出る。パラオには漁業を専門とする漁師はいないそうだが、港にはモーター付きの漁船がたくさん係留されていた。魚が食べなくなったら沖に出て捕ってくるという漁で、自分のため、家族のため、周りの人のためで、決して商売のためではないらしい。魚を突き刺してとらえるモリの竹軸をたき火の火を使って真っすぐに矯正する様の実演を見せてもらった。



モリの製造



モリうち実演

旧日本軍が設置した灯台の跡を見学する。

灯台跡近くの平坦地で、今日の昼食が準備されていた。昨日の昼食に劣らずの質と量で美味しくいただいたが、一番感激したのは、2 台のテーブルに各々日本流の生け花が飾られていたこと。まさに想定外の範囲外というもので感激しました。



旧日本軍灯台跡



盛りだくさんの昼食

ガラルド州 昼食後はガラルド州へ。待ち受けてくれた人達の中に日本語の達者な“しんちゃん”がいて、これから行く「若返りの泉」の伝説について説明を受ける。一口で言えば、親孝行の話で、日本の養老の滝伝説的なものとのこと。伝説の親が住んだ眺めの良い山に登って麓の若返りの泉へ下るルートをとる。登りも下りもかなりの急坂だったが、驚いたことに足場は整備され、ロープも準備され、登った地点には新設のベンチが置かれていた。

明らかに我々のために事前に時間をかけて作業していただいたことが推察された。「泉」は川に変わっていた。皆さん手を川水に浸していたが、さて若返ったでしょうか？ 近くに滝があるとの話で見に行くも全貌を見ることはできなかった。出発点まで帰って、用意してくれた冷たいココナツ汁を飲みながら、“しんちゃん”からパラオの男女関係や日系の血がパラオ人の3分の1には流れているなどのお話を聞く。



若返りの泉の前で 「しんちゃん」 こと「チバナ シンジ」さんと記念撮影（B班）

バスで海岸に出る。海に入れるチャンスだったが、干潮で遠浅の海は相当な沖まで行っても足首ほどの水深しかなく、水泳は不可。アマモの繁殖状況を田中先生にお見せしたいと、江崎さんと田中先生は沖合で観察。休憩タイムで、またしても果物やココナツ汁をふるまっていた。

昨日は集合に遅れ、B班やパラオの皆さんをお待たせしたので、早めに帰路に就く。民泊所で荷物を置いて今晚の夕食会場であるコミュニティセンター（昨日とは違う建物）に行く。昨夕に勝るとも劣らぬ大ご馳走、すばらしい食事に今日も感激。昨夜とは違い、今夕には女子5、6名による踊り（フラダンスみたいな）を披露していただいた。



少女による歓迎のダンス

<第4日目（1/16）> （B班は第2日目 1/14）

アイライ州 今日はアイライ州、アイミリーキ州。8時30分に民泊所を出発。まもなく旧海軍通信施設跡（廃屋）に着く。会議などに使用していたらしく、建屋の形は上空から見ると十字の形になっていて、病院か教会と思わせるのが狙いだったとか。2階建ての建物は半壊状態で、近くの空き地に錆びた戦車や機銃が他所より移設されて陳列されていた。ここで亡くなられた人たちのお墓もあり、悲惨な歴史の一端を見ることが出来た。



続いてバイを見学。バイは集落の議会に相当するもので酋長含む 10 名の男性しか入ることが出来ない。集落のすべての方針がここで決定されるので、パラオは男性社会のように思われるが、決議に加わる男性は女性の意向で選ばれる。女性に人気のない男は酋長にはなれない仕組みになっていて、パラオでは今も女性の力は強いとのこと。バイの壁面には集落の歴史が刻まれていて、アートとして見ても面白い。



アイライ・バイ（パラオ最古）



その内部



精霊のバイ



アイライ州の酋長

小屋の中に大事に保管されている昔の戦い用のカヌーを見学させていただく。20 人乗りくらいの大型カヌーで、船中央に立つ指揮者の掛け声に合わせて櫂をこぐ。みんなで実演も試みた。これで本当に戦争したのかどうか、伝承ではどちらかに一人犠牲者が出た時点で戦争は終了する習わしになっていたとのこと。戦争による被害を極小にする知恵で、これもバイで決められたことだそうです。



カヌーの上で熱弁をふるう酋長

カヌー置き場の近く、海の狭まったところがあり、石作りの遺構があって、ここは昔、通行する船から通行税をとっていた関所の跡。

潮風が吹き抜ける小屋で昼食。ここでも御馳走が一杯。当然にココナツ果汁も。



関所跡



ランチタイム



ココナツの葉のアート作り実演



A 班



B 班

アイミリーキ州 昼食後、バスで薬草園に移動。入口に親切に杖を用意してくれていたが、思ったほどのアップダウンはなく川沿いの道を歩く。ところどころ、樹に名板がかかっているが充分とは思えず、日本で見る薬草園とは趣が異なっていた。見学したのは広い薬草園の一部の範囲だった。



薬草園



雨降り伝説（川に投げ入れられ石になった曾長）

またバスに乗車。テラス（ケズ）に向かう。テラスは昔パラオの人たちが内陸部に移り住んだ時に作られた人口の丘で、バベルダオブ島内にはたくさんあるそうです。訪ねたアイミリーキのテラスは、丸い丘を残して周囲が削られて平面部が作られていて、触ってはダメという伝承の石が一つポツンと立っていました。数名の有志が急斜面をよじ登って頂上へ。見晴し以外には遺物などは何もない頂上でした。



テラス（ケズ）



女神を象徴するストーンフェース

本日 2 か所目のバイを見学。決められた男性以外は、バイの中には入れない厳しい掟があると学んだところですが、このバイは今なら中に入って見学自由と言うことで、ぞろぞろと女性も中に侵入。中には炉が作られており、酋長たちはここに集合すると会議が終わるまで何日もここから出られず、飲み食い・排泄もすべて中で行うとのこと。このバイの壁画は先ほどのバイとはまた違う独特の意匠となっていました。



アイメリーキ・バイ

内部

床下は全て石の上

3 日間、パラオの人たちにお世話になりましたが、いよいよ今晚の夕食会でお別れ。海辺でサンセットディナーをするので、5 時 30 分までには会場へ着くというプランにそって帰路を急ぎ、定刻前には現場に到着できた。B 班も同じころに到着。しかし、もう太陽は没してしまい、おまけに小雨がぱらついてきたのに、料理は一部用意されているが未だ完全ではない模様。そうこうするうちに、料理が遅れているので待つて欲しいと告げられる。幸いに雨は止んだが、辺りはもうすっかり暗くなってきた。結局、食事が始まったのは 2 時間遅れの 7 時 30 分頃。これもパラオ時間と騒がない。今夜も踊りの披露があったが、成人男子の勇壮な出陣前のダンスで力強く迫力があつた。最後の晩餐なので、パラオ側から観光局長が、こちらは田中先生がお互いに感謝の気持ちを述べ合った。3 日間、我々が受けた歓待ぶりは、本当に過分すぎると心底から思える内容だった。本当にお世話になりました。感謝。



海岸沿いの会場



田中先生から御礼の挨拶



パラオ観光局局長の挨拶

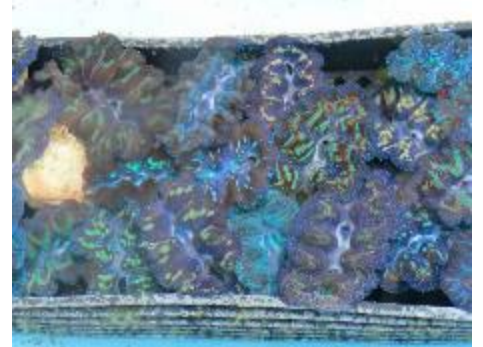


<第5日目 (1/17) >

朝食は階下のオーナーさん夫人が連日準備して下さるのだが、今日が最後の朝食となる。気を聞かせていただいたのか、今朝はお稲荷に味噌汁がついていた。もちろん他にもたくさん。オーナーさんご夫婦とは深い交流が出来たとは言えないが、でもお世話になりました。

9時30分、阪急交通社手配の大型バスに、B班、ついでA班と乗り込み出発。パレイシアホテルによって夜まで荷物を預ける。ホテルから10分ほどでマラカル島（橋で繋がっている）の水産試験場へ。與世田さんの案内で水産試験場の会議室へ入室し、1時間弱、スライドによるパラオの水産事情について説明をしていただいた。與世田さんは田中先生と旧知で、昨秋より派遣されてパラオの水産事業開発の支援をされていて、ウミブドウ、オキナワモズク、ナマコなどの増産をテーマにされておられる。

水産試験場の横に新設されたシャコガイの養殖場へ移動。養殖場は日本の支援で建設されたもので、未だ全部の施設が稼働していない状態でした。待つて居ていただいた曾根さんからシャコガイのお話、ついで水槽の中のシャコガイを見せていただく。シャコガイにも種類は多く、現在8種類が飼育中とのこと。なにせ養殖場としてはこれから充実していくそうで、施設としてはまだ一般には未公開だそうである。シャコガイ一筋という職人風の曾根さんにはどこか好印象が持てた。



バスで少し走った所のレストランで昼食。メインはハンバーグなどでこれまで 3 日間のパラオ料理から普段の料理に戻った気がする。日本人客が多く、感じの良いレストランだった。

エピソン博物館に行く途中で、戦前に使われていたという石組のプール跡を見学。海岸横にあり、海水がそのまま入ってくる仕組みで、大人用と子供用の 2 つに分かれている。だいぶ痛んだ感じはするが、昔のイメージはそのままのこっていた。パラオの郵便切手を買いたいとの希望があり郵便局へ。残念なことに、今日は担当者がいなくて切手は販売していないと言われた。

エピソン博物館は 1 回が展示場、2 回が土産売り場で、1 回にはエピソン元大統領が収集した多方面にわたる品々が所狭ましと並べられていた。



戦前の海水プール



工芸木工所



エピソン博物館

とりあえずパレイシアホテルに帰還。ここから 18 時まで自由時間。お土産を求めてほとんどの人が街中に。街中と言ってもざっと一目で見渡せる程度の広さ。買い物をしているうちに、若返りの泉でパラオの男女間・夫婦間の力関係など面白く説明してくれた“しんちゃん”が経営するレストランが近くにあることが分かり 7, 8 名程で店を訪ねた。飲み物を取ってしばし歓談しながら休憩。

18 時、パレイシアホテルのレストラン内の 1 室でパラオ最後となる夕食会（懇親会）を開催。午前中にお世話になった與世田さんにもゲストとして参加していただく。ここも食べきれないほどの料理の数で、今回のパラオの旅は最初から最後まで満腹攻めの料理の連続だった。食事をしながら、皆さんから一人ずつパラオの感想を語っていただく。パラオ側の目いっぱいの対応ぶりに皆さんやはり感激した模様で感謝の声が多かった。

2 時間の懇親会タイムが終わって、8 時にパレイシアホテルをバスで出発。帰りの飛行機時間は真夜中の 1 時 45 分で時間はまだまだ長い。パラオ空港のラウンジへ入り、12 時までの時間をそれぞれ眠るなり、おしゃべりするなりしてつぶす。



<第 6 日目 (1/18)>

12 時になって空港ロビーへ移動。搭乗手続きを経て、ついに思いで一杯のパラオに別れを告げた。

来た時と同様に、グアム空港で乗換。2 時間ほどの待ち時間の後、関西空港へ向けて飛び立ち、10 時 10 分に無事に到着。関空内で解散した。



<感想>

パラオ自然観察会の担当者になったものの、どこからどう詰めていったらよいのか、誰に詳細を確認したらよいのか、その辺りがハッキリしないままに時間がどんどん過ぎていき、焦燥感にさいなまれました。11月20日に鳥羽の江崎さんの事務所で、パラオから来日された観光局長やジョンさんを始めとする視察団の一行とミーティングが出来て、やっと車輪が動き始めた感がして、少し安堵の思いでした。

パラオへ着いた最初の夜、宿舎のパレイシアホテルではジョンさん以下、関係者の方たちが総出で出迎えていてくれて驚きましたが、それからの3日間の彼らから受けた接待ぶりには感謝を超えて驚きの連続でした。パラオ（バベルダオブ島）の自然・文化・歴史を朝から夕までフルに詰め込んだ3日間でした。本当に力の限りの、精一杯の“おもてなし”をしていただいたと思います。パラオの人たちとの3度目の夕食会が終わり、我々が去った後、後に残った江崎さんのお話では、パラオの人たちはしばし放心状態、そしてやり終えたという達成感に浸っていったとのこと。そんなパラオの人たちに、私達は何をお返しすることができるのでしょうか？ 田中先生がおっしゃっておられたように、後日またパラオを訪ねるシニア自然大学校のグループが出てくるのが一番かもしれません。パラオの人たちだけでなく、笹川平和財団の塩澤さん、海島遊民クラブの江崎さんにも大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。田中先生、そして旅行期間中、ご協力いただいた参加者の皆さんにも感謝いたします。ありがとうございました。（了）